

## 英文法拾遺 VII

伊 藤 清

### (10) 前置詞

#### (A) *from*

日本人には前置詞の理解は困難であると言われている。辞書を見れば数項目から30項目余りにまで分類されてその用法が説明されている。しかし前置詞の用法を含め言葉は本来単純素朴なものであり、教育の有無とは殆ど無関係に万人が使用しているものであって、何十項目にまで分類しなければ説明し切れない程、また使用しえない程複雑多岐に亘るものではない。例えば *from* は手許の辞書では10の項目に分類されているが、それ程までに分ける必要があるとも、またその分類の仕方に必ずしも統一があるとも思えない。即ち前置詞という性質から考えて、その後に来る語、その目的語との関係を中心として説明すべきものであるのに、その説明の仕方以外に、前置詞の前に来る語の意味によって分類したり、文の内容によって分類したりしている。

Apples fell *from* the tree.

これは《運動・動作などの起点・位置》という項目にある *from* の意味用法を説明する1例であるが、別の項目では《分離・解放・変化・抑制・妨害》として

awake *from* a dream

をその1例として載せている。*From* 自体が分離～妨害を表わすとは到底思えないが、それはともかくとして、これは内容に従った分類であり、また別の項目には《視点・観点・判断の根拠》として

speaking *from* experience

を載せている。これら *awake*, *speak* と共に使用された *from* を第1例に倣って《運動・動作の起点》としてはどうしていけないのか。また第1例の *from* は第2例の項目中の「分離」などでは不適當なのか。更に次の例文

Choose a tie *from* among these

が《選択の範囲》という項目 (*from* に「選択の範囲」などという意味用法があるとは考えられないが) になっているのに倣って、第1例を「落下の起点」、他の2例を夫々「覚醒の起点」、「発言の起点」とはできないのか。これら4例はすべて別々の項目の下に分類されているが *from* そのものの意味する「起点」自体は何ら変っていない。更にまた一方では「～の起点」、「～の根拠」とその意味を説明しながら、他方では「分離～妨害」、「選択の範囲」などと *from* 自体に存在しない意味を *from* に付与している。分類に統一性がなく、その場その場の状況で項目を増しているとしか考えられない。その他 *from* と時間の関係についても同じことが言い得る。*From* そのものの説明から逸脱して分類するのであれば更に項目を増やすこともできるであろう。但しそれを以て精緻、詳解とは言わない。

ある程度項目別にして意味を説明し例文を添えることは理解には便利であろう。しかし項目別にするのはあくまでも理解のための便法に過ぎない。語には夫々根源の意味があり、たとえ多くの意味を有していようともそこから派生したものにすぎない。前置詞の意味もどれ程広がろうとも、それら個々の意味はその前置詞の持つ意味の一面を表わしているにすぎない。それら個々の意味を綜合した漠然たる意味がその前置詞の意味であり、この全体的意味を把握すること、纏めて精神を掴むことが肝要であり、細分化だけにとどまるのであれば徒勞に終るであろう。前置詞は漠然たる習慣的慣用である。英米人が話をし、書いている時、この *from* の用法は辞書の5番目の項目に相当するものだ、原料を表わすものだ、口語的用法だなどと考えている筈がない。その前置詞の有する根本の意味を漠然と理解して用いているにすぎない。1つ1つの項目を暗記したり、同じ前置詞を項目に区別する必要など些もない。前置詞の根本

的意味のみか、それに関連した極めて少数の意味用法を知れば十分である。

多くの文法書の説明の仕方についても疑問がある。同一の語句であればその意味は同じであり、異なれば意味は異なる。*After all, for all, with all* はいずれも「～にもかかわらず」と訳されているが、3つの前置詞が同一である筈がない。*in principle* と *on principle*; *in these circumstances* と *under these circumstances* などについても同じことが言える。多くの文法書は原因、理由を表わす前置詞として *from, of, on, through* などを挙げているが、例文とその日本語訳を付けているだけである。原因とあればこれらの前置詞はすべて同じ意味を有するのか、原因を表わすのであれば、どんな場合でもどの前置詞でも使用しうるのか。どういう理由でどの前置詞が使用されるかなどの説明は殆どない有様である。説明があっても *through* は間接原因、*from* は直接原因などとあるのみで役に立つ説明とは思えない。各前置詞の意味の説明、他の前置詞との意味・用法の差を説明をしないで、原因を表わす前置詞として1例を挙げただけで学習者が理解できるであろうか。文法書に実際的価値がなければ文法書としての価値はない。前置詞を数多くの項目に分類する暇があれば、その意味を説き、他の前置詞との意味内容の差の説明に力を注ぐ方が遙かに有効であろう。

以下 *from* と *to* の用例は網羅したものではなく、ただそれらの主旨を説明する為に用いたものに過ぎない。また説明の便宜上比較的類似したものを纏めたものであり、それらも他の説明の中で用いてもよいものである。何故ならそれらの有する根本的意味は同じであるからである。

(1) *From* は場所、時間、その他抽象的事象からの出発点を示す。*From* の働きはただこれだけである。*From Osaka to Tokyo, from east to west* (p. 9 で説明), *from five to nine, from bad to worse* などの例は辞書では夫々別の項目の下に載せられているが、出発点たる意味は明瞭で項目を別にしてまで説明をする必要はない。

keep a secret *from* others (他人から秘密を引き離しておく)

tell wheat *from* barley (小麦を大麦から引き離してその特徴などを言う)

paint *from* nature (自然からカンバスに移す)  
 the scent *from* the lilacs (ライラックから出る匂)  
 She was dressed *from* Paris. (パリから取り寄せて着る)  
 mortality *from* malaria (マラリアに起因する死亡率)  
 vomit *from* repletion

最後の例も vomit するに到った出発点が満腹であり、これに対し drink to repletion の to は到達点を示す。

(2) 以下 *from* の意味を他の 2, 3 の前置詞と比較して考える。

*from* : *of*

Die *from* の *from* は死の出発点を示し、それと共に (*from*~) to ~ (〜に到る) の意味を暗々裡に含むために「離れる」の意味は次に述べる *of* に比べて一層明確であり、また離れる距離も一層大である。従って死の遠因や「徐々に (死に到る)」などの意味を有する。*Of* も死因から離れてはいるが、*of* や *off* は分離を意味し、ただ離れてさえいればそれでよい。勿論同一原因であっても次に引用する Somerset Maugham の劇 *The Sacred Flame* の中に見るように人 (の主観) により、場合によって異なる前置詞を用いることもある。尚最後の 2 例に関し、ある文法書では「“cause” (原因) という語を用いれば “die” の次でも *from* を用いる」とあるがどうい理由からであろうか。

Nurse: Everybody dies *of* heart failure. (みんな心臓麻痺で死ぬのですね。)

Liconda: Nurse Wayland is not satisfied that Maurice died *from* heart failure. (看護婦のウェイランドさんはモリスが心臓麻痺で死んだことに納得していないのです。)

Liconda: Is it possible that Maurice can have died *from* chloral poisoning? (モリスがクローラルの毒で死んだなんていうことがありうるでしょうか。)

Stella: Do you really think that Maurice died *of* an over-dose of his sleeping-draught? (あなたはモリスが睡眠薬の飲みすぎで死んだと本当に考えているのですか。)

Harvester: You know just as well as I do that Maurice died *of* natural causes. (あなたは私と同様モリスが自然死だということを知っているでしょう。)

Nurse: If he died *of* natural causes a post-mortem will prove it. (もし彼が自然死なら検死がそれを証明するでしょう。)

類似した死因であっても He died *from* lack of food は「徐々に」と lack of food を直接の死因とは感じないのに対し、それが重なって hunger を招けば、直接の死因と感じて He died *of* hunger となる。

上記の *from*, *of* は *made from*, *made of* についても通用する。*From* は製品の出発点を示し、*die from* に関して述べたのと同じ理由で、材料からの距離は一般的に大であり、また場合によっては「念入りに(作る)」などの意味が強い。高校のある教科書の例文

The teacher made letters *from* twigs

も *of* を用いた場合に比べて「工夫して、手間をかけて」の意味が強い。以下の例文に就いても同じことが言える。

He had ordered a large wreath to be made *from* the laurels in the farmhouse garden and sent down to be placed on Boxer's grave. —George Orwell: *Animal Farm* (彼は農家の庭の月桂樹で大きな花環を作りボクサーの墓前に供えるよう命じた。)

John Thornton was whittling the last touches on an axe-handle he had made *from* a stick of birch. —Jack London: *The Call of the Wild* (ジョン・ソーントンは樺の木切れで作った斧の柄を最後の仕上げに削っていた。)

tiny shacks built *from* cartons and packing crates and rusted corrugated roofing —Norman Mailer: *The Dead Gook* (ボール箱や荷造り用の木箱や波形の錆びたトタンの屋根板で建てられた小さな掘っ建て小屋)

最後の例も *from* 以下の材料は本来建築の素材ではなく、それらを使って「苦労して」の意を含む。また agent を強く意識すれば *by* も用いられ、素材を表すのに *off* も用いられることもある。

a sort of porch made *by* two yew trees —John Galsworthy: *The Apple Tree*

Besides taking all that's thrown to them, they made a lot of meals *off* the chickens that get in there to peck around. —Frskine Caldwell: *Kneel to*

*the Rising Sun* (放りこまれたものを全部食った上に、あいつら(豚)は入り込んで来て餌をあさってる雑まで何度も食ってしまうんだ。—meals は食事の回数)

この *from* に対し矢張りある教科書にあった例文

This coat is made *of* coal  
Some of the clothes are made *of* oil

の *of* は、「このコートは石炭なんだ」などと驚きの気持を表す。また *out of* は音量、語数から言っても *from* に比べ何とかして「作り出す」という気持が強い。

Mrs. Bassett: She certainly must be made *out of* Indian rubber. — Tennessee Williams: *Summer and Smoke* ((転んでも怪我をしないなんて) 彼女はきっとゴムでできているのでしょうね。)

これらの *from*, *of* は *heal*, *cure* などの後に来る場合でも同じであり、*from* を用いた場合には「やっと治った」と病氣、怪我からの離脱、遠く離れる気持、逃れる気持が強いのに対し、*of* は単に分離、離れることに止まるという違いがある。このことは「持ち去る、盗み去る」の気持を表す *steal from* と「奪い取る、取り上げる」の気持の *rob of* にも感じられる。

come *from* a place  
come *of* a family  
come *from*, *of* a cause

では第1例の *from* は産地、第2例の *of* は家系、*cause* の場合は原因などと説明されているが、*from* は離脱と共に、既に述べたように距離感、移動感が伴う為であり、これに比べると *of* は距離感余り強く感じられない為に、*from* も用いられるが、*from* に比べ一層一般的である。*Cause* の場合もそれからの遠近の差を示す。

*from* : *through*, etc.

get ill *from* overwork  
faint *from* hunger  
The bench was warm *from* him.

suffer *from* rheumatism  
pant *from* one's exertion

これらは普通原因を表わすとされる用法であるが、矢張り形容詞 *ill*, *faint*, *warm*, 動詞 *suffer* (苦しみの出発点がリウマチ, そこから来た苦しみをなめる), *pant* の出所が夫々の前置詞の目的語であることに変わりはない。尚動詞 *suffer* の次には *from* を用いると説明している文法書もあるが必ずしもそうでなく

I could see the gun-bearer was suffering too *with* fear.—Ernest Hemingway:  
*The Short Happy Life of Francis Macomber*

の *with* は *with a cold* の *with* と同じく「共に、取り付かれて」の意で用いられる。

上掲の *from* に対し

He ran away *through* fear  
All this was done *through* envy  
He was dismissed *through* laziness

等の *through* も原因を表わすと説明されている用法であるが, *fear*, *envy*, *laziness* を通り抜けて (逃げ去るなど) と通過, 濾過する気持を表わす。He trembled *for* fear の *for* は「恐怖のために」と原因, 理由を表わす。

その他同一の語の後に異なった前置詞が用いられる事例は数多いが, それらの意味の差は要するに前置詞の意味の差に帰着する。数例を挙げれば

negotiations *from* strength

は「力からの, 力に起因する, 力を背景にしての, 交渉」であり, *by* を用いれば「威圧を加えて」と密着性が *from* よりも強い。

*from* necessity

は「必要から」であるのに対し, *be driven by* necessity; *under* necessity 等における *by* は *agent* を, *under* は *under these circumstances* と同様「～の圧力を受けて」の意を表す。

be named *from*

be named *for*

be named *after*

*From* は「～から取って名付ける」、*for* は例えば「～が偉かった為に(その名を取って)」と *famous for* の *for* と同じく理由、根拠を表わし、*after* は「擬える、肖るように追いかける」等の意を以て用いられる。

defend a person *from* harm

等の類は *against* attack のように抵抗してはねのける、撃退すると言った気持よりも、既に述べた離脱、逃れるという気持が強い。

### (3) cease (*from*)

同一の動詞でありながらその次に前置詞を使用したり、しなかつたりすることがある。例えば *cease* の場合 *from* が使用されたり、されなかつたりし、しかもその場合 *keep (from)* などの場合と違って意味に大差はない。ただ使用すれば *cease* は自動詞となる。自動詞とは *write to him* の如くその中に目的語を内包している故動詞だけで意味に纏まりがあり、目的語の存在を必要とする他動詞よりも動作を表す力は強いと言える。従って前置詞を用いた場合、例えば *cease from writing* には「筆を断つ」といった強い意味が生じる。次の引用文にあっても前置詞のある方が決定的意味を有する。尚こういった傾向は *approve of*, *attain to* その他に就いても言い得ることである。

He had made no noise, yet it ceased *from* its howling and tried to sense his presence. — London: *The Call of the Wild* (彼は物音を立てなかった。

しかもその狼は遠吠えをやめてしまって彼の存在を感じ取ろうとした。)

Our own vessel was at length ceasing *from* her struggles, and sinking with her head to the sea. — Edgar Allan Poe: *Manuscript Found in a Bottle*

(我々の船は遂にあがくのをやめてしまって、船首から海に沈みつゝあった。)

上述の場合と異なり前置詞が続く場合がある。wind *from off* the field 「野原の離れたところ (*off*) から (*from*)、野原の向うから、吹いて来る風」の意であるが、2つ前置詞が並んでいるから二重前置詞と言うのは余り意味がある



とは思えない。*From* は次に来る句をその目的語としており、抽象的なものを具体的に、また逆に具体的なものを抽象的に考える言語の特質の1つの表われであり、上例も次の例も前者の場合である。

*from across* the table                      *from among* the trees  
*from behind* the curtain                  *from under* the table  
*from within* the processes

その他形容詞、副詞をその目的語として *far from impossible*, *from below*, *from now*, *from within* 等があり、*from overseas* や *from abroad* の場合も *overseas* (*over + seas*) や *abroad* を名詞的に具体的に考えている。また次の例で *close to* は普通は *near* が一般的に使用されるが、前者の場合は接近状態が強い。対象物が分っている場合には「(～に) 近い所、(～に) 近よった状態」と名詞的に具象的観念を示す。

*From close to*, the Baron's house seemed even more eerie than ever. —  
 Michael Bond: *Here Comes Thursday!* (近くから見ると男爵の邸はますます不  
 気味に思われた。)

(B) *to*

(1)a *From* とは逆に *to* は *The train slowed to a stop* に見るように「到達」を意味し、到達は2者間の直接的関係を表わすことに繋がる。

*To* も辞書では多くの項目に分類されているが、根本はこの「到達」にある。

look up *to* the moon

月という一点を見るという意味を表す *at* と違って、*to* は視線を上げて行って月そのものに到っているのであって、月の存在する方向を見ているのではない。同様に *turn to a person*, *turn to the right* は向きを変えて行って、人、右に行き着くことを意味する。月の場合と同じく両者の間の距離の大小は問題ではない。*go to the west*, *from east to west* に於て *west* は漠然と考えた西の地帯、地点、そこへの到達を考えているのであって *to the moon* の場合と同様方向、方角ではなく到達を意味する。*live a few miles to the west* は

「2, 3 マイル西へ行った所に住む」を意味する。

次のような場合もすべて同じく到達を示す。

*to the minute* (あの分という単位まで)

*to an inch*

*to the point*

*to a fault* (1つの欠点に到る位に, 余りにも)

*to (an) excess*

*to the nines* (0.999... 殆んど1に近い状態まで, 殆ど完全な状態に到るまで)

*to an excess* に於る *an* は *excess* の度合の小さい場合から大きい場合まで数多く考えられる事例の1つの場合を指す。*To* の代りに使用される *in* は「*excess* の状態で」の意を表す。

“’Tis the same face, *to a hair!*” cried one man cutting a caper for joy.  
—Nathaniel Hawthorne: ‘The Great Stone Face’, *Twice-told Tales* (「同じ顔だ, そっくりだ!」と1人の男が悦びで跳ね回りながら叫んだ。)

*to a hair* は「頭髪1本に到るまで」の意であり, *to the turn of a hair* は「1本の髪を振れ具合, 曲り方, 癖, に到るまで」

次の第1例では本を開いて行って5頁に到るを意味する時は *to*, 開く対象と考えれば *on*, 1点と考えれば *at* が用いられる。第2例は「(読んでみたら) ~という主旨に到る手紙」, 第3例は「服を注文の条件に到る, 合う, ように作る」, 最後の例は「流行に到達している服装をする」の意を表す。

Open your books *to* page 5.

a letter *to* the effect that

make suits *to* order

dress *to* the fashion

以下の例に於ても最初は *bow (one’s respect) to an acquaintance* 「知り合いに対して敬意を到達させる為に」と敬意の到達点を示し, 第2例も動作の効果が相手に届くようにと, たとえ相手との間に距離があろうとも動作の到達点を示す。

*bow to an acquaintance*

take off one's hat *to* a person

pay reverence *to* the sun

次の第1, 2例は屢々引用される *sing to the piano* (歌って声をピアノの変化する音調に到らせる—合せる)と同じ用法である。第3例はある事柄が「人の驚きにまでたち到る」の意味であり、内容から言っても文尾に用いられるのも極めて自然である。

The house shook *to* the wind. (風に到達する, 風に合せる—一家は風にゆらいだ。)  
 The ship throbbled *to* the tireless pulse of the propeller. — London: *The Call of the Wild* (船は推進機の倦むことのない鼓動に合わせて震え続けた。)  
*to* one's surprise

I began to shoot snipe *to* M'cola's great disgust. — Ernest Hemingway: *GHOA* (私は鴨を射ち始めマコーラはひどく嫌悪した。)

Yellow Sky had a kind of brass band, which played painfully, *to* the delight of the populace. — Stephen Crane: *The Bride Comes to Yellow Sky* (イエロー・スカイの町は1種のブラスバンドを持っており、痛ましい位一生懸命になって演奏し人々をよろこばせた。)

その他 *to* all appearance(s) (どこから見ても) は見る動作の到達した結果であり, *from* を用いれば「あらゆる視点から見ても」即ちそこから総合判断をしての意を表わす。Get *to* one's feet は「足で立つ状態に到るまで」の意味であり, 先に述べた *from behind the curtain* などとは反対に具象的なもので抽象的なものを表わす例と言える。

There is nothing *to* him. (何も付け加えるものなし, ただあれだけの男)  
 There is no index *to* the book. (索引が付いていない)  
 That's all there is *to* it. (ただそれだけのこと)  
 take a woman *to* wife (妻の状態にまで持って来る—妻にする)  
 call a person *to* witness (証人に呼ぶ)  
 He is *to* home.

wife, witness が無冠詞であることは *neighborhood* に示される如く *wifhood* とでも言うべき妻たるの状態を示す。最後の例は「家に戻って来ている一家に

居る」の意味を表す。

(1)b 最初に述べたように到達は即ち2者の直接的、相対的關係を生ぜしめる。従って上述の(1)a とこの(1)b とは表裏1体を為すもので無關係なものではない。先に述べた例えば *There is no index to the book* も *index* と *book* との直接的關係を示す。

*He is a friend to our cause.* (我々の主義・主張に対して友好的)

*Care is an enemy to life.*

*War was ruin to him.* (彼に対する破滅)

*honor to one's country* (国に到る、寄与する、名誉一國の為になる名誉)

第1例は *He* と *cause* との直接關係を示し、*friend* は兩者間の關係狀態を説明する。第2例も *Care* と *life* 2者の相対的關係を示し、*enemy* は兩者間の關係狀態を説明する。第3、4例も *War* と *him* との、また *honor* と *one's country* との相対的關係を示す。

*The nightmare came to life.*

*The portraight characterised him to the life.*

前者は「万物の生きている状態、生きいきしている状態に達した」、後者は「その人の生きている状態に達した、近よった」の意であり、この場合の *the* は対象物を意識しているが故に用いられたものである。その他 *true to life* 「実物、本物そっくり」も兩者の直接的、相対的關係を表す。

*a title to the property*

*an heir to one's wealth*

前者は *title* が *property* に抽象的にくっついていること(手に入れている状態)、即ち兩者の直接的關係を、後者は *heir* が将来 *wealth* に付くことを示す。その他 *consultant to a firm* の *to* も同様であり、*for* に代れば会社の「利益の為に」働く *consultant* を意味する。

*nail a notice to the door* (ドアに付くように釘付けにする)

*a key to the door* (ドアにまで持って行く、当てる、鍵)

*wife to*

end *to* end

直接的關係を示す *to* に対し a key of the door は「ドアの持っている、ドアに合う、鍵」を意味し、wife *to* は直接的關係を、wife of は所有を表す。また最後の例は両者を結び付ける直接關係に到るものであるのに対し、on end は既に接触している状態を表す点に於て両者は異なる。

two *to* five

opposite *to*

*to* the contrary

assent *to* the terms

agree *to* a proposal

belong *to*

2:5 は 2 から 3, 4 を経て 5 に到るの意義がうすれて両者の相対的、直接的關係を、第 3 例は contrary の状態に到ると否定を示し、on the contrary は「反対の側にある」こと即ち対照を示す。assent, agree についてもその動作が terms, proposal に及ぶことを表わすものであり、belong *to* も 2 者の相対的対立を表わす。この場合の 2 者の抽象的距離感に対し

He did not belong *with* himself any more. — London: *To Build a Fire*  
(凍死した自分を探しにきた) 彼はもはや彼自身と 1 体ではなかった)

に於る *with* 「共に」には距離感はない。また次の例では居るべき場所が下水管であると belongs は居るべき場所を示す。

He is a rat! He belongs *in* the sewer! — Arthur Miller: *A View from the Bridge* (彼は鼠よ! 下水に住んでるのよ!)

She is kind *to* him.

cruelty *to* animals

damage *to*; loss *to*

孰れも kind, cruelty 等の到達点、She と him, cruelty と animals との直接的關係を示す。尚今迄にも例があったことであるが、kind *to* him の形のみを取り上げれば kind と him との直接的關係を表わすことになる。

It is nothing *to* what he did.

It is all the same *to* me.

prefer A *to* B

It と what he did, It と me との相互間の直接的関係を示す。その他 equal *to*, similar *to* も同性質のものである。第3例はBを基準にしてA, Bの相対的關係を示す。また「Bに対してAを取る」に比べ, value A *above* B や choose A *before* B の差は *above* や *before* の意味の差に他ならない。

He swore *to* the miracle.

confess *to* a crime

不思議な事態に対し嘘でないと言ったと彼と miracle, 即ち人と事柄との, また自分と罪との, 直接的関係を認めたの意を表わす。

(2) *to* : *for*

go *to* America

leave *for* America

前者が行き着くことを考えているのに対し, 後者は出発点を基準として考えており, 前者と違って *for* はアメリカとの直接の繋がりを表わさない。屢々引き合いに出される give *to* と buy *for* に就いても同じことが言い得る。ただ次の如き場合 *for* は「為に」と利益を意味する。

Colin: It's so cruel that I who'd give my life *for* you should have brought all this misery on you. — Maugham: *The Sacred Flame* (あなたの為に命まで投出そうとする私があなをこんなに苦しめることになってしまつて本当に辛い。)

*To* what purpose? 「どんな目的に達する為に」に対し, *For* what purpose? 「どんな目的を達成する為に, どんな目的に向つて」は全般的, 包括的であり, 未だ到達していないことも間接的に感じられる。

on one's way *to* school

は人が学校に到る道と, 人と学校との直接的関係を示す。もし on one's way

*for* school とすれば行く人は学校に向っているのでも、到達するのでもない。向い、到達する意味を表すのは *to* であり、*for* の時は学校との関係は飽くまで間接的である。

listen *to* the footsteps

look *to* the future

前者は耳を傾ける対象に既に到達しているが、*for* であれば「耳をすませる」のであって聞こうとする対象と直接の関係はできていない。後者も対象と既に直接の関係にあるのに対し、*for* では直接的関係は未だ出来上ってはいない。

take a fancy *to*

have a fancy *for*

「いいなと思う、好ましいと思う」は到達してはじめて言えることであり、*take* には動きがあり、主語と *to* の目的語との関係は直接的である。これに対し *have* には *take* の如き動きはなく、憧憬の気持をもってそこに到ろうとするものであり、主語と *for* の目的語との間には未だ直接の関係はない。

a train *to* Tokyo

a train *for* Tokyo

*To* を使用すれば列車の最終目的地 (*for*) とは関係なく、そこに到るまでのどの駅であれ下車しようとする駅に到着することを示す。a train *for* は直接関係として人と列車の最終目的地とを繋ぎ合せていない。勿論下車せんとする駅と列車の最終目的地とが同一の場合もあり、例えば東京へ帰る人は東京へ帰り着くことを問題にしているのだから *to* の方が *for* よりもふさわしいと言える。

a letter *to* him

a letter *for* him

*To* は a letter addressed *to* him (彼宛の手紙) と到達点を示し、*for* は a letter intended (or meant) *for* him (彼に向けた、彼によませようとした手紙) を意味し両者は異なる。

Fresh air is necessary *to* health

では不定の主語 *people* の健康への直接の到達を表すが、*for health* であれば「健康を維持する為に」と間接的である。Indispensable *to* と *for* に就いても同じことが言い得る。次の Maugham の *For Services Rendered* からの引用にも直接的関係と間接的関係の差が感じられる。

Mrs. Ardsley: You're very nice *to* me. (私に対し好意を以て振舞う)

Mrs. Ardsley: It's been nice *for* both of them. (都合がよい—利益)

Howard: Fact is, she's too good *for* me. (私には勿体なさすぎる)

*as to* : *as for*

この場合も *to* は直接的関係を表し、日常語の *about* に近い。*To* の「～に対するものとしては、～に就いては」に対し、*for* は「～に関連するものとしては」と既に述べたように関係範囲が広い。直接関連したことに就いて言うのであれば、His opinion *as to* (or *about, on*) の如くであって *as for* は使用できない。使用できるのは話の途中で話題を変えて「彼の考えとしては」のような場合であり、従って文頭に用いられることが多い。勿論 *as to* も文頭に来るのでそれらの位置は必ずしも用法の区別の基準とはならない。

(3) *pretend ignorance*

*pretend to one's learning*

*cease (from) writing* の場合と同じように *to* にもその有無によって内容に差の生じる場合がある。無智を装うのは努力する必要もなく易しいことであり、努力してそこまでもって行きたいとは誰も思わない。これに対し *to* を用いる時は実際には持っていないものを持っているように装うの意。学問があるという仮定の状態にまで持って行く、努力、無理をして到る (*to*) を意味する。

*drink (to) one's health*

*To* を用いる場合は「誰々の健康に向けて」と杯を上げる人と健康との直接的関係を示す。これに対し *to* を用いない場合は人と健康との直接のかかわり、即ち今既に健康であるという状態を祝うの意。



前置詞でなく副詞の *come to* の *to* も「然るべき状態まで」, *come to oneself* の *oneself* で表わされる人間の普通の状態 *one's normal state* にまでの意。これは具体的なもので抽象的な観念を表わす場合に当る。この *oneself* は次の用法と同性質のものである。

*overeat oneself* = to eat too much, i. e., more than the usual quantity that  
one eats

*oversleep oneself* = to sleep too much. i. e., more than the usual length of  
time one sleeps

*excel oneself* = to be superior to one's own usual capacity